

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 10 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370922

研究課題名(和文) 地域間及びスケール間の比較と相互関係を視点とした地誌学習の理論的・実践的構築

研究課題名(英文) Theoretical and Practical Construction of Regional Geography Learning from the Viewpoints of Inter-regional and Scale-to-scale Comparison and Interrelationship

研究代表者

吉水 裕也 (YOSHIMIZU, Hiroya)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：60367571

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、中学校社会科地理的分野において、地域間及びスケール間の比較と相互関係を視点とした地誌学習の課題を整理し、単元プランを開発することである。

単元プランを開発するために、中学校教員に対する全国調査を実施した。全国の中学校数の1割に質問紙を送付し、その45%にあたる472校から回答があった。この調査で、地理的分野の指導を苦手とする教員の割合が3分野の中で最も高いこと、また、単元を貫く学習課題の設定に苦慮していることが分かった。

調査に基づき、4つの単元プランを開発した。単元プランには、単元を貫く学習課題、知識の構造図などを示した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study are to clarify the problems of regional geography learning from the viewpoint of comparison and interrelations between inter-regions and scale-to-scale in the geographical field of social studies in junior high school, and to develop some unit plans.

In order to develop unit plans, a nationwide survey on junior high school teachers was conducted. We sent questionnaires to 10% of the number of junior high schools nationwide, and there were responses from 472 schools. In this survey, we found the proportion of teachers who are not good at teaching in the geographical field is the highest among the three fields, and that teachers are struggling to set up main question that go through the unit.

Based on this survey, we developed four unit plan. In the unit plan, we showed main questions throughout the unit, structural diagrams of knowledge, etc.

研究分野：地理教育

キーワード：地理教育 スケール アンケート調査 単元を貫く学習課題 比較

1. 研究開始当初の背景

Smith(2000)によると、地理学には3つのスケール概念があるとされる。地図の縮尺に相当する地図学的スケール、研究者が対象とする事象をもっともよく表現する地域の範囲をさす方法論的スケール、事象の発生、変容プロセスである空間的プロセスを伴って形作られていく地理的スケールである。このうち地理的スケールは、実際の地理事象をはじめとする空間事象の発生、変容プロセスに関連しており、地域性の表象と最も関連が深い。関東、近畿などの地域を、行政区分のように所与のものとして展開する地誌学習では、真の地域性は読み取れない。文化などの総体として表象する地域性は行政区分と完全に一致して分布している訳ではないからである。そこで、本研究では重層的スケールの考察を通して地域を学習することが出来る地誌学習を開発する。

地誌学習の構成原理に関しては、これまでも多数の研究が行われてきた。また、わが国では、学習指導要領でもこれまで様々な地誌学習論を展開してきた。もちろん、わが国だけではなく諸外国において、様々な地誌学習論が展開されている。しかし、文化などの概念を視念にしながら、その実質的な広がり地域と捉えた地誌学習論はこれまでほとんど見られなかった。

例えば、志村(2008)は、イギリスのナショナル・カリキュラム地理に準拠した単元計画例であるスキーム・オブ・ワークを分析し、初等地理カリキュラムが、多核的同心円拡大的カリキュラムにより展開されている事を紹介している。この考え方は、内容は異なっているが、発想としては本研究の参考になるものである。

本研究の発想は、平成21～24年度採択の科学研究費による研究「地域のスケールに応じた課題発見内容とカリキュラム開発」の成果によるところが大きい。本研究は、この研究をさらに深化させる意味も持っている。これまでの研究では、身近な地域を例として、重層的なスケール間の関係性を認識させるような単元開発を行ってきた。そこでは、地理的スケールの概念を組み込み、地域を所与のものとして扱わず、同次元スケールの他地域や異なるスケール間の関係から変容していくものであることを捉えさせる単元モデルの開発を行った。しかし、特に異なったスケール間の関係性の認識方法や比較の方法については、まだまだ明らかにできていないところが多い。

2. 研究の目的

本研究の目的は、地域間および重層的スケール間の比較や相互関係の考察の視念を組み込むことにより、中等段階の社会科及び地理歴史科地理教育における地誌学習を理論的・実践的に再構築する事である。地理学や地域研究など、地域を空間的に扱う分野では、

地域を所与のものとして捉えず、発生、変化するものと捉えているものもある。また、地域間および重層的スケール間の比較や相互関係の考察の視念から地域を記載する研究が行われているが、本研究では、中等段階の地誌学習にこれらの発想を取り入れ、地域間及び重層的なスケール間の関係の中で地域が形成されていく過程を含んだ地誌学習として理論的に再構築し、実験授業を通してその効果を実践的に検証する事を目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、以下の3つの方法により実施された。

1点目は、単元プラン開発のためのフレームワークの開発である。単元プランの開発のためのフレームワーク作成するために内外の地誌学習授業および学習指導案の収集を行った。特に地理教育先進国の英国、地誌教育に力を入れており地理オリンピックでも好成績を収めている台湾の動向を調査した。並行し、国内における地誌学習実践状況を調査した。この調査に関しては、研究協力者の協力を得ながら、全国的なアンケート調査を行った。アンケートの手法に関しては、岩本・戸井田・河合・西岡・吉水(2010)を参考に、全国の学校に送付回収した。これらの成果を吟味する場として、また研究が計画通り進むようにするために地誌学習研究会を設定し、定期的に開催した。この研究会は、開発した単元プランを実践してもらう研究協力者に向けて、研究成果を発表し、吟味検討してもらうための会であり、研究協力者との会議に相当する。

2点目は、地理的スケールの概念を用いた地誌授業の単元プランの開発である。収集した授業案、アンケート結果等をもとにして、単元プランの開発を行った。単元プランは研究協力者との連携のもと、大阪又は神戸において定期的に地誌学習研究会を行い、プランの実践可能性を高めるとともに開発したプランを忠実に実践していただけるようにしたい。また、話し合いにおいてプランを改善し、実践可能な状態にした。

3点目は、開発した単元プランを用いた実験授業の実施である。開発した単元プランを研究協力者の勤務校で実験授業として実践した。

4. 研究成果

研究成果を、大きく以下の2点に分けて報告する。

1点目は、授業開発のフレームワークを開発するために行ったアンケート調査の結果である。本研究では、岩本ほか(2010)を参考に、『2014年度版 全国学校総覧』に掲載されている中学校の1割にあたる1049校を対象とするアンケート調査(郵送法)を通して行った。調査項目は、回答者の属性を尋ねるもののほか、世界地誌学習を行う際の留意点、

世界地誌学習実施上の課題，日本地誌学習を行う際の留意点，日本地誌学習実施上の課題を量的に調査するもの。加えて，世界地誌学習および日本地誌学習に関する課題を質的に分析するために自由記述による回答を求めた。質問紙は，2015年3月10日に発送し，同封の返信用封筒により同年4月末日までに472校から返送された（回収率45.0%）。

回答者の属性

回答者は472名である（表1）。教科主任等に役割を担う教員は30代以上に多いのだろうか。30代から50代の教員はほぼ同じ割合である。一般に40代の教員が少ないことはよく知られている。一方で今回のアンケートには，40代の教員が最も多く答えている。学校や教科の中核的な人材が40代に多いことを示唆している。

表1 回答者の年齢（n=472）

年齢	回答者数
20代	49
30代	133
40代	158
50代以上	132

表2は，社会科の中で指導に自信がある分野を聞いたものである。3分野とも自信がある教員が47名いる。一方で，三分野の中では地理を得意とする者が最も少なく91名であり，歴史の195名の半分にも満たない。地理的分野の指導に自信を持っている教員が少ない現状が伺える。

表2 指導に自信がある分野〔複数回答可〕

分野	回答数(n=479)
地理的分野	91
歴史的分野	195
公民的分野	128
3分野とも	47
その他	18

表3は，指導が不得手である分野に関する質問に対する回答である。ここでは，不得手なしが最も多く180名となっている。しかし，地理は143名が不得手であると答えており，歴史の61名，公民の69名に比べて苦手意識を持つ教員が多いことが分かる。

表3 指導が不得手である分野

分野	回答数(n=464)
地理的分野	143
歴史的分野	61
公民的分野	69
不得手なし	180
その他	11

地理の苦手意識はどこから来るのだろうか。表4は，回答した教員が大学（院）時代に専攻した専門分野を聞いたものである。最

も多いのは政治学，法学，経済学，経営学，社会学を合わせた公民系で216名（50.7%），次いで歴史学の115名（27.0%）である。地理は53名（12.4%），社会科教育学は34名（8.0%）であった。その他には心理学や算数教育などの初等教員養成課程で修めた専門分野と考えられるものがみられた（1.9%）。

表4 大学時代の専門分野

分野	回答数(n=426)
地理学	53
歴史学	115
政治学	16
法学	47
経済学	90
経営学	14
社会学	49
社会科教育学	34
その他	8

回答者の属性に関する問いに関しては，以下の結果が読みとれた

- ・ 回答者の大学時代の専門は，地理系12.4%，歴史系27.0%，公民系50.7%，社会科教育系8.0%，その他1.9%であった。
- ・ 回答者が不得手とする分野は地理，公民，歴史の順である。

世界の諸地域学習の扱い

次に，世界の諸地域学習に関する質問についてである。

表5は，世界の諸地域の指導に関する留意点についての回答である（複数回答可）。教科書の事例を中心に，知識を確認する授業をつくっているという回答が312名である一方で，教科書はあまり使わないで独自の考えで授業をつくっているのは22名しかおらず，教員が教科書に準拠して授業づくりを行っている実態が読みとれる。生徒に与える情報に関しては，できるだけ多く（99）とできるだけ厳選（105）が拮抗している。

半数近くの教員が目指しているのは多面的・多角的な視点からの地域的特色を捉えること（231）であり，主題に関わって単元を貫く学習課題を設定して地域的特色を理解させる（99）はそのさらに半数程度の教員が意識している程度である。

全体の1割弱に当たる29名が他地域との比較ができるような授業を設計していることが読み取れる。

表5 「世界の諸地域」の指導に関する留意点〔複数回答可〕

質問	回答数
ア．教科書の事例を中心に，知識を確認している．	312
イ．できるだけ多くの情報を与えるようにしている．	99
ウ．できるだけ情報を厳選している．	105
エ．主題に関わって単元を貫	

く学習課題を設定し、地域的特色を理解させるようにしている。	99
オ．地域的特色を多面的・多角的に捉えられるようにしている。	231
カ．独自に教科書とは異なる主題を設定している。	22
キ．既習地域との比較ができるようにしている。	29
ク．その他	6

表6は、世界の諸地域の指導で感じている困難について(複数回答可)である。最も多いのは、単元を貫く学習課題を設定するのが難しいという答えである。教科書では単元(州)ごとにテーマを設定しているが、明確な学習課題を設定していないこともあり、教員が問いを考えなければならない現状があると考えられる。地誌の学習では、一時間毎に地域の特色を教授する学習を行うような授業が行われており、単元を一つのまとまりとして設計しようという発想が弱い可能性もある。

本研究における問題意識との関係では、他の州との地域比較が難しいと答えた教員が92名おり、比較の難しさも感じているようである。

これら以外にも、教科書に関しては事例が生徒の興味を引かないことや事例が古いことが指摘されている。また、日本の諸地域の指導方法との共通点や相違点が理解しにくい教員も63名いる。また、その他には、時間不足(7名)、資料作成の困難さ(6名)などが見られた。

表6「世界の諸地域」の指導で感じている困難〔複数回答可〕

質問	回答数
ア．教科書の事例が古い。	70
イ．教科書の事例が生徒の興味をひかない。	156
ウ．世界各地の新しい情報を得たいが、情報の収集方法がわからない。	51
エ．単元(州)を貫く学習課題を設定するのが難しい。	200
オ．他の州との地域的比較が難しい。	92
カ．「日本の諸地域」の指導方法との共通点や相違点が理解しにくい。	63
キ．自然、人口、産業...というように展開する地誌学習に比べ、学習内容の漏れがわかりにくい。	13
ク．その他	35

日本の諸地域学習の扱い

表7は、日本の諸地域をどのように扱って

いるかについての回答〔複数回答可〕である。

諸地域学習では、教科書の事例を中心に知識を確認するという回答が最も多い(328)。ただし、生徒に与える情報量に関しては、できるだけ多くという回答(109)とできるだけ厳選という回答(107)が拮抗する。

単元設計に関しては、動態地誌の学習を進めるため、単元を貫く学習課題を設定して構成しようとしている(186)ことがうかがわれる。さらに探究の過程で地域的特色を多面的・多角的に捉えられるような工夫(248)がなされているようである。

一方、考察の仕方を独自に設定している例(20)や、他の地方との比較(51)、日本や世界というスケールの異なる地域との比較(19)という観点を持って授業を行っている教員は非常に少ないことがわかった。

表7「日本の諸地域」の扱い方〔複数回答可〕
質問への回答

質問への回答	回答数
ア．教科書の事例を中心に、知識を確認している。	328
イ．できるだけ多くの情報を与えるようにしている。	109
ウ．できるだけ情報を厳選している。	107
エ．単元(地方)を貫く学習課題を設定し、地域的特色を探究させるようにしている。	186
オ．地域的特色を多面的・多角的に捉えられるようにしている。	248
カ．地方と「考察の仕方」の組合せを独自に設定している。	20
キ．日本の他の地方との比較ができるようにしている。	51
ク．世界や日本全体の地域的特色との比較ができるようにしている。	19
ケ．その他	6

また、表8は、日本の諸地域の指導で感じている困難についての回答〔複数回答可〕である。ここでも教科書の事例が生徒の興味を引かない(159)ことや事例が古いこと(58)というように教科書に関する指摘が多い。さらに生徒に与える情報の厳選が難しい(110)というように、教科書に依存しつつ生徒に与える情報をどのように厳選するのか悩む教員の姿が見える。教科書が採択等を考えて作成される中で、どうしても網羅的になる傾向から生まれる問題かもしれない。また、単元を貫く学習課題の設定の難しさ(156)が目立っている。世界の諸地域以上に動態地誌学習の要素が強い日本の諸地域学習では、単元を貫く学習課題を「なぜ疑問」で立てなければならないという感覚が強いのだろう。ここでも、教科書で扱われている学習内容を網羅的に扱うことができ、かつ生徒の学習意欲を喚起する学習課題の設定に悩む教員の姿が見える。その他には、時間不足(5)、内容重

複(5)などが見られた。

表 8 「日本の諸地域」の指導で感じている困難〔複数回答可〕

質 問	回答数
ア．教科書の事例が古い．	58
イ．教科書の事例が生徒の興味をひかない．	159
ウ．情報の厳選が難しい．	110
エ．単元(地方)を貫く学習課題を設定するのが難しい．	156
オ．既習事項の活用や他の事象との関連づけが難しい．	81
カ．「考察の仕方」と地方との対応関係がしっかりこない．	97
キ．他の地方との地域的特色の比較が難しい．	92
ク．世界や日本全体との地域的特色の比較が難しい．	54
ケ．その他	23

世界の諸地域学習および日本の諸地域学習に関する主な結果は次の通りである。

- ・ 世界地誌学習および日本地誌学習ともに、教科書の内容や高校入試を意識、知識の習得を重視する教員が比較的多い。
- ・ 世界地誌学習および日本地誌学習ともに、教科書に記載されている内容が古いと感じたり、生徒の関心を引かないと感じたりしている教員が比較的多い。
- ・ 世界地誌学習および日本地誌学習ともに、地域的特色を多面的・多角的に捉えられるようにしている教員が比較的多い。
- ・ 世界地誌学習および日本地誌学習ともに、教科書と異なる主題や考察の仕方を設定している教員は少数である。
- ・ 特に世界地誌学習では、単元を貫く学習課題の設定が難しいと感じている教員が多い。
- ・ 教科書の学習内容に比べて時間数が確保されておらず、知識量と探究学習のバランスに悩む教師が見られる。

全体計画作成における留意点

表 9 は、地理的分野の全体計画作成における留意点についての回答である(複数回答可)。教科書にできるだけ準拠(344)と教科書に比較的準拠(126)を合計すると 470 名となる一方で、教科書はあまり使わないで独自の考えで授業をつくっているのはわずか 8 名しかおらず、教員が教科書に準拠して授業づくりを行っている実態が読みとれる。現行学習指導要領では、世界の諸地域学習は地域ごとに主題を設定して学習する事になっており、教科書で採用されているものとは異なる主題を設定して授業づくりをする事の困難さが示唆される。

また、高校入試に対応できるよう考慮して授業づくりを行っていると感じている教員が 155 名いる。高校入試で問われる内容が静的で持ち運び可能な知識であることから

であろうか。さらに、生徒の探究的な活動を重視して授業づくりを行っている教員が 137 名いる。単元を貫く問いの設定は、探究的な学習につながる。探究的な学習と高校入試に対応できるよう考慮することの両立に悩む教員が少なからずいるのではないかと想像される。

表 9 地理的分野全体計画の作成に関する留意点〔複数回答可〕

質 問	回答数
ア．教科書にできるだけ準拠して作成している．	344
イ．教科書に比較的準拠し、かつ、独自の考えを組み込んで作成している．	126
ウ．教科書はあまり使わないで、独自の考えで作成している．	8
エ．地理的知識を重視して作成している．	106
オ．生徒の探究的な活動を重視して作成している．	137
カ．生徒に世界像を形成させることを重視して作成している．	68
キ．高校入試に対応できるよう考慮して作成している．	155
ク．その他	6

以上、全体計画の作成に関する主な結果は以下の通りである。

- ・ 教科書に沿って全体計画が作成されている。
- ・ 高校入試に対応できる考慮して全体計画を作成している。一方で、生徒の探究的な活動を重視している。

若干の考察

これらの調査から、地理的分野の指導を苦手とする教員の割合が比較的高いことがわかった。その影響からか、教科書に準拠した授業を行う教員が多い。

学習内容に関しては、情報を精選する必要性を感じている教員と教科書の情報では不足と考えている教員が拮抗している。20 代の教員は、学習に必要な情報の見つけ方がわからないと回答しているものが見られるため、情報を提供する窓口を設定する必要がある。

また、単元を貫く学習課題の設定に苦慮する姿が見える。学習課題の発見過程を教科書に組み込む、又は充実されるなどの対策が考えられる。さらに、学習課題を設定するために単元全体で習得する知識等の構造を示す必要がある。学習課題の構造が示された教科書や学習指導案の開発が求められるとともに、学習課題の構造化ができる教員の養成が求められる。

2 点目は、単元プランの開発である。調査結果から、単元を貫く課題の設定が難しいと感じている教員が多いことがわかった。また、他の地域やスケールとの比較は意識してい

るものの、実際には難しいと感じている教員が多い。さらに、入試を意識しているため、知識と探究のバランスに悩む教員が多いことがわかった。

そこで、単元を貫く課題を設定し、他地域やスケールとの比較・関連付けを意識し、さらに単元で学習する知識を構造化した実践を開発した。開発した単元は、中学校「アジア州」、「ヨーロッパ州」、「九州地方」、「関東地方」の4単元である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

吉水裕也(2015) 中学地理 教科書と現実社会を近づける「世界と日本の結び付き」の学習, 教育科学社会科教育 Vol.52, No.677(2015年9月号), pp.42-43.

吉水裕也(2015) 地理から世界の「今」が見えてくる! 子どもの興味と視点を広げる地理ネタ+授業化ヒント 国土・地形, 教育科学社会科教育 Vol.52, No.678(2015年10月号), pp.48-49.

吉水裕也(2016) 新学習指導要領における地理教育 授業デザインのポイント 地球環境の危機, 教育科学社会科教育 Vol.53, No.681(2016年1月号), pp.26-27.

吉水裕也(2017) 「学びに向かう力」を意識した学習ナビゲート レベルアップのポイント 獲得した概念を用いたパフォーマンス課題の設定と評価, 教育科学社会科教育 No.694(2017年2月号) pp.72-75.

吉水裕也(2017) 社会の問題について思考・判断するための課題設定・探究とその評価, 教育科学社会科教育 No.696(2017年4月号), pp.1-6.

〔学会発表〕(計3件)

吉水裕也(2015) 中学校地誌学習の実施状況とその課題 - 全国アンケート調査に基づいて -, 2015年7月19日(日), 日本地理教育学会(奈良教育大学)

吉水裕也(2015) ポスター発表 中学校地誌学習の実施状況とその課題 - 全国アンケート調査に基づいて -, 2015年8月8日(土), 人文地理学会地理教育研究部会(明石市生涯学習センター)

吉水裕也(2015) 社会科授業研究における質的研究法の課題と可能性 - 教科教育学研究としての授業研究における質的研究法 -, 2015年11月8日(日), 日本社会科教育学会第65回全国研究大会課題研究(宮城教育大学)

〔図書〕(計1件)

吉水裕也(2017) 第2章第2節 社会的な見方・考え方の一つとしてのスケール, 原田智仁, 關浩和, 二井正浩編著『教科教育学研究の可能性を求めて』風間書房, 2017年3月, (pp.85-94)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉水裕也(YOSHIMIZU Hiroya)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号: 60367571